

語用論からみたミス・マーブルシリーズ — 呼称, 指称語, イン／ポライトネス —

湯地 ゆかり[†]

Pragmatic Study of Miss Marple Series — Addressing, Terms of Address, and Im/Politeness —

Yukari Yuchi

1. 緒言

アガサ・クリスティ (Dame Agatha Mary Clarissa Christie: 1890 - 1976, 以下クリスティ) は、「ミステリの女王 (Queen of Mystery)」と称され、世界中に膨大な数の読者・ファンをもち、作品売上げ総数は、推計で、英語圏において10億部以上、世界全体では20億部以上といわれ、史上最も作品が売れた小説家 (the best-selling fiction writer of all time) としてギネス世界記録 (Guinness World Record) に認定されている[1]。また、クリスティ没後ほぼ50年が経とうとしている現在でも、その著作は日本をはじめ世界各国で売れ続けている。

その一方で、クリスティの作品は、生前から数多くの手厳しい批評に晒され、かなり最近まで、文学ではなく研究に値しない、と言われてきた。また、プロットとトリックのみが優れたパズル小説であり、読者はパズルを解くことに魅力を感じるだけで、作品を読み返す価値はない、と評され、人物造形がステレオタイプで薄っぺらく、作中人物たちの会話にはリアリティがない、と批判されてきた。たとえば、クリスティ亡きあと「新ミステリの女王」と称されたルース・レンデル (Ruth Rendell: 1930-2015) がクリスティの人物造形を評した言葉は、非常に辛辣である。'To say that Agatha Christie's characters are cardboard cut-outs is an insult to cardboard cut-outs.'

しかし、クリスティの作品が単なるパズル小説であり、ステレオタイプで薄っぺらな人物造形にリアリティがない会話なのだとする、なぜ世界中で20億部も本が売れ、現在も売れ続けているのだろうか。

そこで、本稿では、ミス・マーブル・シリーズの長編を題材として用いて、主に会話のリアリティを検証するために、ブラウン&レヴィンソン (Brown & Levinson) やカルペパー&ホー (Culpeper & Haugh) のイン／ポライトネス・ストラ

ジー (im/polite-ness strategies)、ゴフマン (Goffman) のフェイス (face) に関する理論、滝浦の呼称に関する理論を参照して、各登場人物が使用している呼称、指称語、イン／ポライトネス・ストラトジーを検討した。

2. 先行研究

処女作 *The Mysterious Affair at Styles* (『スタイルズ荘の怪事件』1920年) から70年以上経った1990年代に入ってから、クリスティの著作は盛んに研究されるようになり、その研究分野は、文学のみならず、比較文化学、ジェンダー学、建築学、記号学、食物学等、かなり幅広い。

言語学の分野でも、ポアロものの *The Murder of Roger Ackroyd* (『アクロイド殺し』1926年) 及び *Murder on the Orient Express* (『オリエント急行の殺人』1934年) を中心に、レトリック、文体論、クリスティが用いた読者を騙すテクニックを語用論的立場から分析したもの等がある[2][3][4]。これらの先行研究は、読者を欺くテクニックがどのように用いられているかという観点から、会話文や地の文の解析を行ったものであり、呼称やフェイス、イン／ポライトネス・ストラトジーの理論を適用して作品の登場人物の人物造形や人物描写を分析するものではなかった。

また、ポライトネスの視点からの先行研究としては、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte) の1847年の作品 *Jane Eyre* (『ジェーン・エア』) とクリスティの1934年の作品 *Murder on the Orient Express* 『オリエント急行の殺人』とを題材にした Maha Majeed Anber (2020) の研究がある[5]。この研究は、時代が異なる2人の女流作家の作品におけるポジティブ・ポライトネス (positive politeness)、ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)、FTAとみなされる表現の数や割合を、数値解析し、時代や小説分野による相違を比較したものであり、やはり、呼称やフェイ

[†]2023年度修了 (人文学プログラム)、現所属：有限会社三月

ス, イン／ポライトネス・ストラトジーの理論を適用して作品の登場人物の人物造形や人物描写を分析するものではなかった。

3. 作品分析に参照した主な理論の概要

3.1 ゴフマンのフェイス

アーヴィング・ゴフマン (Erving Goffman) (1967) [6]によれば, フェイス (face) とは他者からみた自己のイメージ (image of self) であり, フェイスワーク (face-work) とはフェイスを首尾一貫したものにするために人がとる行為であり, フェイスを脅かす「出来事 (incidents)」に対抗するためのものである。このフェイスワークには, 表敬 (deference) と品行 (demeanor) とが含まれ, 表敬の主な形として, 回避儀礼 (avoidance rituals) と提示儀礼 (presentational rituals) とが挙げられている。回避儀礼とは, 行為者が受容者から距離をとり, ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) の言うところの受容者の「仮想のパーソナル領域 (ideal sphere)」を侵害しない形の表敬である, と説明し, 相手を個人名 (personal name: ファーストネーム) で呼ぶのを避けることを例として挙げている。

3.2 ブラウン&レヴィンソンのフェイス及びポライトネス・ストラトジー

ブラウン&レヴィンソン (Brown & Levinson: 以下B&Lとも称する) (1987) [7]は, フェイス (face) をポジティブ・フェイス (positive face) とネガティブ・フェイス (negative face) とに分類し, それぞれ, 以下のように定義している。

positive face: the want of every member that his wants be desirable to at least some others ... in particular, it includes the desire to be ratified, understood, approved of, liked or admired

negative face: the want of every 'competent adjust member' that his actions be unimpeded by others

滝浦 (2008) [8]は, ポジティブ・フェイスを近接化と表現し, 「他者に受け入れられたい・よく思われたい欲求」と, また, ネガティブ・フェイスを遠隔化と表現し, 「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない欲求」と定義している。また, これらのポジティブ・フェイスやネガティブ・フェイスを侵害する行為がフェイス侵害行為 (FTA: face threatening act) であり, FTAを明示的に軽減するポライトネス・ストラトジーには, ポジティブ・フェイスに対応するポジティブ・ポライトネス・ストラトジーとネガティブ・フェイスに対応するネガティブ・ポライトネス・ストラトジーとが含まれる。

3.3 呼称 (addressing)

日本では, 古代から, 神々の名前や天皇をはじめ貴人の名前を口に出すことをタブーとする風習があった。明治・

大正時代の法学者穂積陳重 (1926) [9]は, この風習を「実名敬避俗」という用語で定義した。滝浦 (2022) [10]は, 穂積 (1919) [11]の「近きは卑しく遠きは貴し」という知見を, 呼称の"遠近"に関する先駆的ポライトネス的原理と説明している。また, 滝浦 (2013) [12]は, この「近きは卑しく遠きは貴し」の原理を, 「親密な間柄の相手とはもともと距離が近いから, 直接呼んでも相手への侵犯にはならないが, もともとと近くない相手を直称するならば, 相手の領分を土足で侵犯するような意味合いを帯び, ゆえに賤称ないし罵称となるのである」と説明している。

一方で, ゴフマン (1967) [6]も, 'Avoidance of other's personal name is perhaps the most common example from anthropology, and should be as common in sociology.'と述べている。すなわち, 英語圏でも, 相手をファーストネームで呼ぶという最も近接的な直称が許されるのは, 親しい間柄となって, 心理的な距離が縮まった場合のみであり, それまでは, MrやMiss, Mrs. (現在ではMs.も多く使われる) の敬称をつけたり, Dr, Inspector等の肩書をつけて呼ぶことが普通だと思われる。

さらに, 滝浦 (2022) [10]は,

呼称に焦点を当てて, ヨーロッパの言語と日本語を対比させながら見てきた。"遠近"を同じように利用していると言えそうな両者の仕組みにもかかわらず, それを通してコミュニケーションする人々の意識は, むしろ反対を向いているように見えてくる。相手に失礼のない"遠い呼称"にいつも心を砕いている日本人に対して, ヨーロッパの人々は, "近い呼称"を誰に使うかということを意識しているように見える。

と述べている。

また, 滝浦 (2008) [8]は, 指示詞「コソア」に関して, コトアにおける経験の現場性・直接性対ソにおける経験のメタ性・間接性という区分があり, さらに, コトアの間には, 時空的な近／遠の対立があると述べている。

大まかに言えば, 日本語の「これ」「この」は英語ではthis, 「あれ」「あの」は英語ではthatに対応する。thisは時間・空間的に近いものを指し, thatは時間・空間的に遠いものを指す。さらに, this, thatは, 時空的近／遠以外に, 心理的距離の近／遠を表わす場合に用いることもできる。特に, 第4章で示すように, 限定詞としての'that'は, 対象に対する心理的距離が遠い (状況によっては, 好ましく思っていない) ことを暗示する場合がある。

4. 会話場面例における考察

性別, 年齢, 階級 (職業を含む) を各キャラクターの属性を表す指標として用い, さらに, Miss Marple (以下, ミス・マーブル) と各キャラクターとの関係性 (親密性及び優位性), 並びに, 会話の目的を加味して, 用いられている呼称 (addressing, 名前や姓を含む呼びかけ) や指称語 (term of address, 特にdear, darling等のterm of endearment

(親愛を示す指称語)の差異, FTA (face threatening acts: フェイス侵害行為) 及びイン/ポライトネス (im/politeness) ストラトジーを検討した。また, 考察で言及した箇所には, 必要に応じて下線を付した。

4.1 プロの家政婦 Lucy Eyelesbarrow

4:50 from *Paddington* (1957, Harper Collins Publishers, 『パディントン発4時50分』)

(A) "Not anywhere," said Miss Marple, "I don't think you've followed the thing to its logical conclusion, my dear Miss Eyelesbarrow."

"Do call me Lucy. Why not anywhere?" (Chapter 5, page 51)

(B) "You seem to assume quite confidently that I shall find it," said Lucy. "I don't feel nearly so optimistic."

"I'm sure you will succeed, my dear Lucy. You are such an efficient person." (Chapter 5, page 54)

(C) She went into the telephone box, put in the money and dialled.

"I want to speak to Miss Marple."

"She's resting, miss. It's Miss Eyelesbarrow, isn't it?"

"Yes."

"I'm not going to disturb her and that's that, miss. She's an old lady and she needs her rest."

"You must disturb her. It's urgent."

"I'm not -"

"Please do what I say at once."

When she chose, Lucy's voice could be as incisive as steel. Florence knew authority when she heard it.

Presently Miss Marple's voice spoke.

"Yes, Lucy?" (Chapter 6, page 63)

(D) "Gentlemen," said Miss Marple, in the tone of one speaking of some alien and dangerous species, "are all very much alike in some ways - even if they are quite old..."

"Darling," cried Lucy. "A hundred years ago you would certainly have been burned as a witch!" (Chapter 16, page 181)

Lucy Eyelesbarrow (ルーシー・アイルズバロウ: 以下, ルーシー) は, オックスフォード大学卒業後に, 家事労働分野の人材不足に目をつけてプロの家政婦という職業を自ら選択した若い女性である。病後のミス・マーブルの世話をするために短期に雇用されたことがある。ルーシーの階級は明示されていないが, 彼女の経歴や教養, 会話から, ミス・マーブルと同じupper middle class出身者であると考えられる。

ミス・マーブルのルーシーに対する呼称は, 会話場面 (A) にあるように, 当初は, 独身の女性に対する呼称としても, また, 家政婦等の若い上級使用人に対する呼称としても一般的な, 敬称Miss+名字のMiss Eyelesbarrowであった。一方, ルーシーからミス・マーブルへの呼称も, 会話場面例には出てこないが, 当初は, 雇用主である (であった) 独身女性に対する一般的な敬称であるMiss+名字の

Miss Marpleが用いられていた。

会話場面 (A) において, ルーシーは, 自分をファーストネームのLucyと呼ぶことを, ミス・マーブルに対して許可 (依頼) している。このため, 会話場面 (B) や (C) では, ミス・マーブルからの呼称はファーストネームであるLucyに変化した。

term of endearment (親愛を示す指称語) に関しては, ミス・マーブルは, Miss Eyelesbarrowという遠隔的呼称を用いていた時点でもmy dearを加えることにより, 親愛の情を示している。ミス・マーブルは, それ以降も, 変わらず, my dearを指称として用いているが, ファーストネームのLucyにmy dearを付けており, 2人の関係がさらに近接的なものになっていることが示されている。

一方, 会話場面 (D) にあるように, ルーシーからミス・マーブルに対しては, Miss Marpleという遠隔的呼称からdarling というterm of endearmentに変化している。ルーシーがdearではなくdarlingを用いているのは, たとえば, Collins Online Dictionary[13]によるdearの定義の2つ目の意味のためではないかと推察される。

1. You use dear in expressions such as 'my dear fellow', 'dear girl, or 'my dear Richard' when you are addressing someone whom you know and fond of.

2. You can also use expressions like this in a rude way to indicate that you think you are superior to the person you are addressing.

会話場面(A)~(D)を時系列で見えていくと, 当初から, ミス・マーブルとルーシーの間では, ネガティブ・ポライトネスに分類されるような丁寧な表現はほとんど使われておらず, 相手への信頼が増すにつれて, 近接化する傾向が強いポジティブ・ポライトネスが増えている。年齢差はある2人だが, 互いに相手の能力を認め合っているため, かなり率直に, 対等の人間として会話をしている。

一方で, 会話場面 (C) は, 主に, ルーシーと, かつてミス・マーブルに雇用されていたメイドの一人であり現在は自宅で下宿屋を営むフロレンス (ミス・マーブルは一時的にその家に寄宿中である) との電話での会話である。フロレンスは, ルーシーへの呼称としてmissを用いている。missは, 若い女性に対する一般的な敬称であると共に, 店員から若い女性の顧客に対する, あるいは, 使用人から若い令嬢に対する, 呼びかけ (addressing) にも用いられる。さらに, 電話をかけてきた相手を確認するために, You are Miss Eyelesbarrow, aren't you?という二人称を用いた疑問形ではなく, It's Miss Eyelesbarrow, isn't it?という, より遠隔的な三人称を用いた疑問形を用いている。これらの呼称や疑問文の形以外にも, 下線部の会話の流れからも, ルーシーとフロレンスの階級差が示唆されている。

4.2 付き添い Miss Knight

The Mirror Crack'd from Side to Side (1962, Harper Collins Publishers, 『鏡は横にひび割れて』)

語用論からみたミス・マーブルシリーズ
 一 呼称, 指称語, イン/ボライトネス 一

(E) "Here we are!" she exclaimed with a kind of beaming boisterousness, meant to cheer and enliven the sad twilight of the aged. "I hope we've had our little snooze?"

"I have been knitting." Miss Marple replied, putting some emphasis on the pronoun, "and", she went on, confessing her weakness with distaste and shame, "I've dropped a stitch."

"Oh dear, dear," said Miss Knight. "Well, we'll soon put that right, won't we?"

"You will." said Miss Marple. "I, alas, am unable to do so."(Chapter 1, page 9)

(F) "And now I'm just going out for my wee toddle." said Miss Knight humorously. "Shan't be long".

"Please don't dream of hurrying back." said Miss Marple politely and sincerely.

"Well, I don't like to leave you too long on your own, dear, in case you get moped."

"I assure you I am quite happy," said Miss Marple. "I probably shall have" (she closed her eyes) "a little nap."

"That's right, dear. Anything I can get you?"

Miss Marple opened her eyes and considered.

"You might go into Longdon's and see if the curtains are ready. And perhaps another skein of the blue wool from Mrs Wisley. And a box of blackcurrant lozenges at the chemist's. And change my book at the library - but don't let them give you anything that isn't on my list. This last one was too terrible. I couldn't read it." She held out *The Spring Awakens*.

"Oh dear dear! Didn't you like it? I thought you'd love it. Such a pretty story."

"And if it isn't too far for you, perhaps you wouldn't mind going as far as Halletts and see if they have one of those up-and-down egg whisks - not the turn-the-handle kind."(Chapter 1, pages 9-10)

(G) "Here we are." said Miss Knight, settling a breakfast tray on the bed-table beside Miss Marple. "And how are we this morning?" I see we've got our curtains pulled back." she added with a slight note of disapproval in her voice.

"I wake early," said Miss Marple. "You probably will, when you're my age," she added.

"Mrs Bantry rang up," said Miss Knight, "about half an hour ago. She wanted to talk to you but I said she'd better ring up again after you'd had your breakfast. I wasn't going to disturb you at that hour, before you'd even had a cup of tea or anything to eat."

"When my friends ring up." said Miss Marple, "I prefer to be told."

"I'm sorry, I'm sure." said Miss Knight, "but it seemed to me very inconsiderate. When you've had your nice tea and your boiled egg and your toast and butter, we'll see."

"Half an hour ago," said Miss Marple, thoughtfully, "that would have been - let me see- eight o'clock."

"Much too early", reiterated Miss Knight.

"I don't believe Mrs Bantry would have rung me up then unless it was for some particular reason," said Miss Marple thoughtfully. "She doesn't usually ring up in the early morning."

"Oh, well, dear, don't full your head about it." said Miss Knight soothingly. (Chapter 6, pages 56-57)

(H) "Are you sure you don't feel the draught from that window, dear?"

"I like a little fresh air." said Miss Marple.

"Ah, but we mustn't catch cold, must we?" said Miss Knight archly. "I'll tell you what. I'll just pop out and make you a nice eggnog. We'd like that, wouldn't we?"

"I don't know whether you would like it." said Miss Marple. "I should be delighted for you to have it if you would like it."

"Now, now." said Miss knight, shaking her finger. "so fond of our joke, aren't we?"(Chapter 19, pages 220-221)

Miss Knight (以下ミス・ナイト) は, 病後のミス・マーブルの世話をするために雇用された付き添いである。ミス・ナイトの階級は明示されていないが, 職業や会話から, lower middle classの出身であると考えられる。

会話場面(F)~(H)にあるように, ミス・ナイトは, 雇い主である独身の女性に一般的に用いられるMiss Marpleという敬称Miss+ 名字で呼びかけることもなく, 雇い主の(若くない) 女性に対する呼びかけに用いられることの多いma'am (奥さま) という敬称も使用していない。ミス・ナイトがミス・マーブルに対して用いる呼称 (addressing) は, dearやmy dearというterm of endearment (親愛を示す指称語) のみである。

カルペパー&ホー (Culpeper & Haugh) (2014) [14]によれば, darling等のterm of endearmentは, 恋人や夫婦間以外に, 近しい関係の女性同士の家族・親族間やfavorite people (お気に入りの人同士) の間で用いられる。

ミス・マーブルシリーズでは, 夫婦や恋人間以外では, 自分よりも目下に対する呼びかけにはdearが, 目上にはdarlingが用いられていることが多い。親しい友人でも隣人でもないミス・ナイトからミス・マーブルへのdear, my dearというterm of endearmentの使い方は, ミス・マーブルからすると, 4.1に記載した, Collins Online Dictionary[13]のdearの2番目の定義 You can also use expressions like this in a rude way to indicate that you think you are superior to the person you are addressing.に該当すると感じられて, 許せない気持ちになる, と推測できる。

さらに, ミス・マーブルは, ミス・ナイトが動作主であるIやyouの代わりにweを用いることに, 強い違和感を覚え, 会話場面 (E) や (H) にあるように, ミス・ナイトへの返事で, Iやyouという代名詞を強調する話し方をしていく。

ミス・ナイトのweの使い方は, カルペパー&ホー (2014) [14]によるところの看護者 (carer) が患者 (patient) に使

う we (= not I but you) に合致するところが多い。このように、自分と雇い主とを同一視するような話し方は、18世紀から19世紀を中心に20世紀の途中までイギリスに存在した lady's companion の一部にもみられた雇い主との一体性を表す we の使い方と同様のものであると思われる。この時代、イギリスの upper class (上流階級) または upper middle class (上位中流階級) の女性は職業につくことなく自宅で大部分の時間を過ごしており、自分よりも少し下の階級の女性を話し相手や付き添いとして雇うことがあり、レディスコンパニオン、あるいは単にコンパニオンと呼ばれていた。この作品が書かれた1962年当時には様々な職業につく女性も増えており、コンパニオンという職業はほぼ姿を消したと思われるが、ミス・ナイトはある意味古い時代を象徴する人物として描かれている。

また、職務に過剰に忠実ともいえるミス・ナイトは、ミス・マーブルを、雇用者である前に保護対象であり、自分が面倒を見ないと生活できない可哀そうな老女だとみなしている。そのために、会話場面 (F) での図書館から借りる本の選択等、ミス・マーブルの意思を尊重するよりも、自分が正しいと思うことをミス・マーブルに押し付けることが、最善だと信じている。結果として、ミス・ナイトは、ミス・マーブルに対し、共感的、保護者的な親愛の情を示し、距離を近づける近接的な方向性のポジティブ・ボライトネス・ストラトジーを多用している。

一方で、ミス・マーブルは、ミス・ナイトとの距離を保とうとしており、会話場面 (F) では、Please don't dream of hurrying back, You might go into, if it isn't too far for you, perhaps you wouldn't mind, という言い回しや please, might, would 等の使用、否定形を用いる等、遠隔的なネガティブ・ボライトネス・ストラトジーを多用している。

さらに、会話場面 (H) において、ミス・ナイトは、窓が開いていることを気にして Are you sure you don't feel the draught from that window, dear と隙間風が気になるのでは? というほめかしを行うことにより、Close the window というミス・マーブルからの依頼を期待したと考えられるが、I like a little fresh air. とミス・マーブルにかわされてしまう。そこで、次に、(隙間風で) ミス・マーブルが風邪をひくといけないからエッグノックを作ってくると提案し、We'd like that, wouldn't we? と、ミス・マーブルもエッグノックが好きはず、と勝手な決めつけを行っている。ここでも、ミス・ナイトとしては、すべての発言はミス・マーブルのためであり、ミス・マーブルに配慮をしていると考えている。が、ミス・マーブル側からすると、ミス・ナイトは必要がない提案を次々として大きなお世話をやき、ミス・マーブルのネガティブ・フェイスへの配慮がなく、FTAを繰り返しているとしか思えない。そのため、ミス・マーブルは、I don't know whether you would like it. I should be delighted for you to have it if you would like it と、would や should を用いた丁寧な表現を用いた皮肉を返しているが、ミス・ナイトは、これを冗談と決めつけている。

4.3 マーブル宅のお手伝い Cherry Baker

The Mirror Crack'd from Side to Side (1962, Harper Collins Publishers, 『鏡は横にひび割れて』)

(I) He grinned at his wife and asked:

"Who says so?"

"My Miss Marple for one!" said Cherry. [snip]

"I should say she could do with a bit more nourishment herself. That old cat of a White Knight of hers, gives her nothing but carbohydrates." [snip]

"Invalid diet!", said Cherry and snorted. "Miss Marple isn't an invalid - she's just old. Always interfering, too."

"Who, Miss Marple?"

"No. That Miss Knight. Telling me how to do things! She even tries to tell me how to cook! I know a lot more about cooking that she does." [snip]

"Why did your Miss Marple say that I needed nourishing? [snip]" (Chapter 16, page 196)

(J) Miss Marple called in a high clear voice:

"Cherry, come here a minute."

Cherry switched off the vacuum and opened the drawing-room door.

"I didn't mean to disturb you by singing, Miss Marple." (Chapter 19, pages 222-223)

Nemesis (1971, Harper Collins Publishers, 『復讐の女神』)

(K) "Do you think it's all right to do that at your age? These things can be very tiring, you know. You have to walk miles sometimes."

"My health is really very good," said Miss Marple, [snip]

"Well, be careful of yourself, that's all," said Cherry. "We don't want you falling down with a heart attack, even if you are looking at a particularly sumptuous fountain or something. You're a bit old, you know, to do this sort of thing. Excuse me saying it, it sounds rude, but I don't like to think of you passing out because you've done too much or anything like that."

"I can take care of myself." said Miss Marple, with some dignity.

"All right, but you just be careful." said Cherry. (Chapter 5, pages 57-58)

Cherry Baker (チェリー・ベイカー: 以下チェリー) は、ミス・マーブル宅の通いのお手伝いで、後に、夫で大工の Jim Baker (ジム・ベイカー: 以下ジム) と共に住み込みの使用人となった。チェリーは本人や夫の職業、会話の内容等から考えて、working class (労働者階級) に属すると考えられる。

チェリーのミス・マーブルに対する呼称は、会話場面 (J) にあるように、雇い主である独身の女性に一般的に用いられる Miss Marple という敬称 Miss + 名字である。一方、ミス・マーブルのチェリーに対する呼称は、メイド等の下級使用人に対する呼称として一般的なファーストネームの

Cherryである。これは、一見すると、同等の階級の親しい女性に対するファーストネームでの呼びかけと変わらないように見えるが、会話の内容は、対等の関係性に基づくものではなく、あくまでも、雇用者と使用人の立場を逸脱することはない。また、同等の階級の女性に対してミス・マーブルが多用するdearやmy dearといったterm of endearmentも使われていない。このことから、互いに親愛の情を持つような間柄でも、自分よりもかなり下の階級である女性に対してterm of endearmentを用いることは、作品執筆当時の1960年代のイギリスでも、まだ一般的ではなかったのではないかと推察される。

チェリーがミス・マーブルを大事に思っていることは、会話場面 (I) において、チェリーがミス・マーブルのことを話すときにmy Miss Marpleという呼称を用いていることから明らかである。また、ジムもそれを理解しているため、your Miss Marpleという呼称を用いている。一方で、チェリーは、ジムにミス・ナイトのことを話すときには、that old cat of a White Knight of hers, that Miss Knightという回りくどい呼称を用いている。いずれの場合も、thatを加えることにより、心理的に遠い距離にあり、ミス・ナイトのことが嫌いだという心情が表れている。さらに、Knightという単語には騎士という意味があり、救済者という意味で用いられるWhite Knight (白い騎士) と表現することにより、正義の味方気取りのイヤな奴という揶揄も含んでいる。

また、会話場面 (K) にあるように、チェリーは、ミス・マーブルの行動に対して、あからさまに反対とかダメとか言うことはなく、危険なことを避けるように、遠回しに説得しようとしている。その際、Do you think it's all right to do that at your age? と疑問形を用いたり、excuse me saying itと謝罪をしたり、it sounds rude, butと付け加えることにより、ミス・マーブルのネガティブ・フェイスに配慮している。その一方で、We don't want you falling down with a heart attack, even if you are looking at a particularly sumptuous fountain or something. fall down with a heart attackと、かなり具体的な例を描写してミス・マーブルへの強い関心を表わすことにより、ミス・マーブルのポジティブ・フェイスへの志向も示している。が、結局、ミス・マーブルの決心を変えさせることはできず、ミス・マーブルにI can take care of myselfと言われ、仕方なく引き下がる。このように、チェリーは、ミス・ナイトとは異なり、自分が正しいと思うことをミス・マーブルに押し付けることはないが、心細やかにミス・マーブルの世話をし、心底心配しているため、ミス・マーブルもチェリーのことを好ましく思っている。ただし、友人のような好ましさではなく、あくまでも使用人としての好ましさである。

5. 属性に基づく全体的な考察

(1) FTA (face threatening acts: フェイス侵害行為) 及びイン／ポライトネス (im/politeness)・ストラトジーに関

しては、指標として用いた属性である性別、年齢、階級 (職業) による明白な差異は認められなかった。むしろ、会話の目的による使い分けが見られた。

(2) 呼称 (addressing) 及び指称語 (term of address) に含まれるterm of endearment (親愛を示す指称語) に関しては、性別、年齢、階級に加えて、相手との関係性 (親密性及び優位性) による明白な差異が認められた。

1. ミス・マーブルから同等の階級で同年配の親しい相手に対する呼称の選択に関しては、性別による明白な差異が認められる。同様に、相手からミス・マーブルに対する呼称の選択に関しても、性別による明白な差異が認められる。これは、gentlemen (男性) を自分たちladies (女性) とは異なるものとみなす、ミス・マーブルのヴィクトリア朝風の価値観によるところが大きいのではないと思われる。

ミス・マーブルから同等の階級で同年配の親しい相手に対するterm of endearmentの使用に関しては、性別による明白な差異が認められる。異性 (男性) の相手に対してはdearを指称語として用いることはない。一方で、同性 (女性) の相手に対してはdearを用いる場合があるが、使用するか否かは相手との関係性 (親密性及び優位性) に依存する傾向がみられる。関係性が対等ではなくミス・マーブルが優位であれば、dearが指称語として用いられる。逆に、相手からミス・マーブルに対するdearの使用に関しては、性別に関係なく、ほとんど用いられない。

2. ミス・マーブルから同等の階級の親しい異性 (男性) に対する呼称の選択に関しては、年齢による明白な差異が認められる。一方で、相手からミス・マーブルへの呼称の選択は、年齢による明白な差異は認められない。逆に、ミス・マーブルから同等の階級の親しい同性 (女性) に対する呼称の選択に関しては、年齢による明白な差異は認められない。一方で、相手からミス・マーブルへの呼称の選択は、年齢による明白な差異が認められる。

ミス・マーブルから同等の階級の親しい異性 (男性) に対するterm of endearment, 具体的には、dearの指称語としての使用に関しては、年齢による明白な差異が認められる。一方で、ミス・マーブルから同等の階級の親しい同性 (女性) に対するterm of endearmentの使用に関しては、年齢による差異がある程度認められる。ミス・マーブルは、若い女性に対してはdearを指称語として頻繁に用いるが、同年配の女性に対しては、相手との関係性 (親密性及び優位性) によってはdearを用いる。また、相手からミス・マーブルに対するterm of endearmentの使用に関しては、相手が異性 (男性) であれば、年齢に関係なく、ほとんど用いられない。相手が同性 (女性) である場合には、年齢による差異がある程度認められる。相手が若い女性で叔母と姪に類するような親密な関係の場合、darlingを指称語として用いている。

3. ミス・マーブルから雇用関係にある (あった) かなり年下の同性 (女性) に対する呼称の選択及びterm of

endearmentの使用、並びに、相手からミス・マーブルへの呼称の選択及びterm of endearmentの使用に関しては、階級による明白な差異が認められる。会話の相手が同等の階級の若い女性であり、契約による対等な雇用関係を結んでいる場合、ミス・マーブルから相手への呼称は、親しくなるにつれて、一般的なprenominal title (Miss)+名字からファーストネームへと変化していく。また、dear, my dearといったterm of endearmentを用いる。一方、相手からミス・マーブルへの呼称は、一般的なprenominal title (Miss)+名字であるが、親しくなるにつれて、呼称としてdarlingという親愛を示す指称語を用いる。これに対して、会話の相手の階級がかなり下 (working class) の女性使用人の場合、親しさに関係なく、ミス・マーブルは下級使用人に対する慣例的呼称としてのファーストネームを呼称として用い、term of endearmentは用いない。相手は、prenominal title (Miss)+名字を呼称に用い、term of endearmentを用いない。

6. ミス・マーブルはなぜミス・ナイトが苦手なのか

ミス・ナイトは、病後のミス・マーブルのために、住み込みの付き添いとして雇われた中年の女性である。ミス・マーブルのようなupper middle classの女性 (lady) に対する付添いという職種は、上級使用人に分類される。このため、ミス・マーブルからミス・ナイトに対する呼称は、上級使用人に対して一般的に用いられるprenominal title (Miss)+名字のMiss Knightであり、dear等のterm of endearmentは用いない。

一方で、ミス・ナイトは、ミス・マーブルに対して、通常であれば、雇い主の独身女性に対する一般的な呼称であるprenominal title (Miss)+名字のMiss Marpleを呼称として用いるか、あるいは、雇い主の若くない女性に対するma'am (奥さま) という敬称を呼称として用いるはずである。また、使用人から雇用主に対してterm of endearmentは用いないはずである。

ところが、ミス・ナイトは、Miss Marpleもma'amも呼称として用いず、dearやmy dearというterm of endearmentをミス・マーブルに対する呼称として用いている。

前述したように、dearやmy dearという指称語は、発話者が目上、聞き手が目下の場合に使われることが多い。このため、ミス・マーブルは、ミス・ナイトにdearやmy dearと呼びかけられるたびに、イライラを募らせている。

さらに、第4章で示した会話場面例におけるミス・ナイトの話し方は、単にterm of endearmentを用いて親愛の情を示しているのみではなく、wee (通常は幼児語) toddle (子供のよちよち歩きの意味) という単語を用いた例からもわかるように、幼児に話しかけるような、子供をなだめるような話し方をしており、それらもミス・マーブルの気に障る。また、ミス・ナイトは動作主のIやyouの代わりにweを用いることが多々あり、ミス・マーブルは、これにも強い

違和感を覚えて、たびたび、ミス・ナイトへの返事で、Iやyouという代名詞を強調する話し方をしている。

ミス・ナイトがこのように雇用主に対してterm of endearmentを使うのは、病気からの回復期にある、あるいは、病弱なupper classからupper middle classの女性の付き添いがミス・ナイトの職業であることに大きく関係していると思われる。

現代でも、医師や看護師等の医療従事者や介護士 (caregiver) が患者、特に年配の患者や、その家族に対して、dear, sweetheart, honey等のterm of endearment、すなわち、親愛の情を示す呼称を用いる例が多々ある。language of caring.com[15]によると、医療従事者や介護士は、positive intent (肯定的な意図) でそれらの呼称を用いているが、一方、そのようなterm of endearmentで呼びかけられた患者の60%はnegative impact (否定的な影響) があると考えている。医療従事者や介護士の意図としては、友好的で親密な雰囲気を作りたくてそのような呼称を用いているが、それに対して、半数以上の患者は、面目をつぶされ、軽視されていると感じると答えている。さらに、上述したIやyouの代わりにweを用いる医療従事者や介護士に対して、上から目線で子ども扱いされていると感じる患者も多い。

ミス・ナイトは、Iやyouの代わりにweを用いてミス・マーブルに話をしたり、ミス・マーブルへの呼びかけにdearやmy dearといったterm of endearmentを用いているが、現代の一部の医療従事者や介護士と同様に、仮にミス・マーブルがそれに対する不満を明示的に表したとしても、"But I meant well!" (「よかれと思って!」) と答えるであろう。

ミス・ナイトは、lower middle classの出身であり、努力して、今の付添いという仕事についたのだと思われる。彼女は、勉学に励んで知識を身に付け、自分で生計を立てられる職業についてのlower middle classのある種のステレオタイプとして描かれている。職務に忠実なミス・ナイトは、ミス・マーブルを雇用者である前に保護対象であり、自分が面倒を見ないと生活できない可哀そうな老女だとみなしている。そのために、ミス・マーブルの意思を尊重するよりも、自分が正しいと思うことをミス・マーブルに押し付けることが、最善だと信じている。ミス・ナイトは、自分とミス・マーブルとの関係を、My Man Jeevesの登場人物である賢いlower middle class (下位中流階級) の従僕Jeevesと賢くないupper class (上流階級) のご主人Woosterのような関係[16]であると思込んでいるのかもしれない。

ミス・ナイトの呼称や指称語の選択、Iやyouの代わりにweを使った表現、さらに、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて近接的に自分が正しいと思うことを押し付けてくる態度により、ミス・マーブルがミス・ナイトを苦手に行っていることが読者にわかりやすく明示及び暗示されている。

7. 結論

クリスティは、ミス・マーブルと各登場人物との会話場面において、会話の相手の性別、年齢、階級（職業）といった属性に基づき、さらに、相手との関係性（親密性及び優位性）、並びに、会話の目的を加味して、呼称（addressing）及びterm of endearment等の指称語を使い分けしている。

一方で、FTAやイン／ポライトネス・ストラトジーに関しては、性別、年齢、階級による明白な差異は見られず、むしろ、会話の目的による使い分けを行っていた。

このような呼称の選択及び指称語の使用やFTAやイン／ポライトネス・ストラトジーの使い分けが、ミス・マーブルと各登場人物との会話にリアリティを生み出していると考えられる。

また、クリスティは、多くの登場人物をあえてわかりやすい単純なステレオタイプに造形することにより、その人物像やミス・マーブルとの関係性（親密性や優位性を含む）を読者が簡単に理解できるようにしている。一方で、主人公であるミス・マーブルに関しては、田舎の老婦人のステレオタイプと名探偵のステレオタイプとを組み合わせることにより新しい人物像を創り出すという、非常に巧みな人物造形をしていると思われる。

ステレオタイプの組み合わせによる人物造形に基づく会話の分かりやすさと、呼称の選択、term of endearmentの使用、及び、FTA、イン／ポライトネス・ストラトジーの使い分けによる会話のリアリティと、が100年という長期間にわたり、全世界で著作が愛され続けている理由の一つなのではないだろうか。

文献

- Human and Social Sciences Vol. 59, No. 2, June 2020
- [6] Interaction Ritual: Essays on Face Behavior. Routledge, Goffman, E., 1967
- [7] Politeness Some universals in language usage, Penelope Brown and Stephen C. Levinson, Cambridge University Press, 1978, 1987
- [8] ポライトネス入門, 滝浦真人, 研究社, 2008
- [9] 実名敬避俗研究, 穂積陳重, 刀江書院, 1926
- [10] 異文化との出会い pp. 91-110, 『ポライトネスの東西対立』, 滝浦真人, 放送大学教育振興会, 2022
- [11] 諱に関する疑 (帝国楽士院第一部論文集邦文第弍号), 穂積陳重, 帝国学士院, 1919
- [12] 日本語は親しさを伝えられるか, 滝浦真人, 岩波書店, 2013
- [13] Collins Online Dictionary | Definitions, Thesaurus and Translations (collinsdictionary.com)
- [14] Pragmatics and the English Language, Jonathan Culpeper & Michael Haugh, Red Globe Press, 2014
- [15] heartbeat-patient-experience-intent-vs-impact.pdf (languageofcaring.org)
- [16] 英語の階級, 新井潤美, 講談社, 2022
- [1] <https://www.guinnessworldrecords.com/news/2018/10/5-page-turning-book-facts#:~:text=1>.
- [2] Rhetorical Structure and Reader Manipulation in Agatha Christie's Murder on the Orient Express, Marc Alexander, Journal of English and American Studies, pp. 12-27, 30 (2009)
- [3] Vagueness and Withholding Information in Christie's (1926) Detective Fiction The Murder of Roger Ackroyd: A Pragma-Stylistic Study, Safaa K. Merzah, Nawal F. Abbas, Arab World English Journal, pp. 331-348, Vol. 11, No. 3, September 2020
- [4] A Pragmatic Study of Deception in Agatha Christie's Novel 'Murder is Easy', Ahad Edan Al-Zubaidi, Hashim A. Mohammed Al-Husseini, Multicultural Education, pp. 463-474, Vol. 7, No. 10, 2021
- [5] A Pragmatic Study of Politeness in Charlotte Bronte's Jane Eyre and Agatha Christie's Murder on the Orient Express, Maha Majeed Anber, pp. 53-76, Al-Ustath Journal for